

(3) 基礎研究

題 目	担 当 者
戦争指導方針決定の構造 －太平洋戦争時の日本を事例として－	立川主任研究官
開戦経緯をめぐる研究に関する一考察	庄司上席研究官
海洋国家の軍備構想 －戦前日本海軍を例として－	相澤第2戦史 研究室長
インテリジェンスの観点から見た1940年の日英米関係	小谷教官
中国側から見た日中戦争 －満州事変から盧溝橋事件まで－	岩谷教官
太平洋戦争初期における戦争指導	屋代主任研究官
ガダルカナル戦以降の日本陸軍の戦略構想 (昭和17年秋～18年春)	進藤主任研究官
太平洋戦争後半期における戦争指導(その2) －陸軍の戦争終結構想を中心として－	和田所員
満州事変が日本の朝鮮支配に及ぼした影響とその原因に関する考 察	山村主任研究官
日本海軍における英国との親善交流について －日露戦争前後における軍艦の英国観艦式派遣を中心にして－	川井所員

3 平成20年度戦史編さん等について

防衛研究所戦史部第2戦史研究室は、「作戦及び戦闘に係る戦史に関する調査研究及び当該戦史の編さんを行う」ことを主任務としているが、平成20年度は、昨年度に引き続き戦史編さん等の業務に重点を置き活動を実施した。平成20年度の戦史編さん業務は次のとおりである。

(1) 戦後史関連の戦史史料編さん

戦後史関連の戦史史料編さんはオーラル・ヒストリー（口述記録の作成）と「基地問題関連資料集」編さんに取り組んでいる。このうち、オーラル・ヒストリーは自衛隊草創期から80年代の我が国の安全保障に関するものであり、

ア 山田良一氏（元航空幕僚長）を中心としたオーラル・ヒストリーの作成

イ 特定のテーマに関するオーラル・ヒストリーの作成

ウ 西元徹也氏（元陸上幕僚長・元統合幕僚長）を中心とするオーラル・ヒストリーの作成

の3件に取り組んでいる。

山田良一氏を中心としたオーラル・ヒストリーは本年度の刊行を、西元徹也氏を中心としたオーラル・ヒストリーは平成21年度の刊行を目指している。

特定のテーマに関するオーラル・ヒストリーは戦後わが国の国防政策について（保安庁警備隊草創期を中心）のテーマで市来俊男氏（元海幹校教育部長）の口述記録を作成し年度中に刊行する予定である。

（2）国外散逸史料の収集事業

防衛研究所による、国外散逸史料の収集事業は、平成18年度より豪州、台湾、英国、フランスを対象として実施してきた。

平成20年度については、前年度の予備調査の結果を受けて、7月13日から8月3日の間、所員2名をアメリカ合衆国の国立公文書館カレッジ・パーク分館に派遣して、同館に収蔵されている旧日本軍関係資料の調査を行った。また、10月にはオランダの予備調査を実施した。

以下の文章は、アメリカ合衆国に派遣された所員の行動概要と若干の所感である。

特別寄稿

米国国立公文書館を訪ねて

戦史部第2研究室 所員 渡邊 剛

成田を7月13日の16時に出発して、13時間でワシントンDCの南西部郊外にあるダレス国際空港に到着した。現地時間では同じ13日の15時30分であった。空港ビルから外へ出ると外気は暑かったが、東京よりも湿度が高くないので不快感はそれほどなかった。

空港からの行程は、まず最寄りの地下鉄ウェスト・フォール・チャーチ駅までシャトル・バスを利用して15分ほどで移動した。ここから地下鉄オレンジ線に乗って20分ほどでランファン・プラザ（L'enfant Plaza）駅に着く。ここでグリーン線に乗り替えてさらに約20分で、カレッジ・パーク駅に着いた。

駅到着後に降り出した雨の中を、徒歩 10 分ほどでメリーランド州立大学に隣接する宿泊所のモーテルに着いた。時計を見ると 1900 であった。宿舎周囲は、大学の所有するゴルフ場を含む広大なキャンパス、その学生職員相手の小規模のショッピング・モールと食堂が数軒あり、その他には閑静な住宅地が点在していた。当地の日の出は 0600 過ぎであり、日没は 2000 頃、暗くなるのは 2100 くらいである。緯度的には秋田、盛岡と同じ 39 度付近だが、西経が 77 度であることで、日照時間帯が日本とは違うようだ。

翌朝、モーテルの運行するマイクロ・バスに乗り、約 10 分ほどで国立公文書館カレッジ・パーク分館に着く。開館は平日の毎朝 9 時である。

構内に入るゲートの前で入場車両のチェックがある。警備員によっては同乗者の『入館証チェック』もあった。車を降りて建物に入る玄関で、空港のような身体検査、所持品検査のセキュリティ・チェックがある。これを済ませて初日にまず行ったのは、サービスカウンターでリサーチ登録をして、入館証を作ってもらったことだった。さらに別のカウンターで電子辞書、カメラ、パソコンなど館内持ち込み品の許可証を作ってもらった。この 2 つの証書は、滞在期間中毎日、分館の各チェック・カウンターで示し続けることとなった。

通常分館での行動は、まず地下のロッカールームに行き、筆記具、ノート、飲食物など、閲覧室に持ち込めない所持品をコインロッカーに預けることから始まる。その後研究者入館ゲートで、入館証、持ち込み品とその許可証のチェック。これらのセキュリティ関係の職員は、警官のような制服を着用し拳銃を腰に装着しており、学究機関の建物の雰囲気となじまない威圧感があるが、これにはアメリカ合衆国国民の財産である公文書を確実に保全しようとする「国家の意気込み」を感じた。

さて、公文書閲覧室は 2 階にあり、ここでも入館者の入退場と所持品チェックが行われる。これまでのチェックと異なるのは、閲覧文書と紛れそうな紙類の持ち込み、文書への書き込みが可能な筆記具の持ち込み、閲覧文書の持ち出しがチェックの対象となる。とはいえ、調査研究にはメモを取る必要があるので、分館側で準備した室内専用のメモ用紙と鉛筆を常設しており、各研究者はこれを借用することになっている。これに使用したメモ用紙の帯出や持込みは認められている。

閲覧室はかなり広く、200 人ほどが収容可能なスペースに机と椅子、検索用パソコンなどが設置してあった。この閲覧室に付属するブースで、検索目録をあたって閲覧資料の請求リストをつくり、それぞれ専門をもつアーキビストにこれを観てもらいながら、各自の調査要領を相談する。

検索目録には、Finding Aid (資料目録) と Master Location Register (書架住所登

録簿)がある。Finding Aidは、資料保管単位であるレコード・グループごとの箱リストである。これで希望する資料の入った箱を特定する。そして、Master Location Registerでその箱の書庫内住所を確認して、これを申請書に記入するのである。

このほかにも検索のための補助ツールがある。それは、Guide to Federal Records (連邦記録ガイド)と、Archival Research Catalog (文書検索目録)である。Guide to Federal Recordsは、米国国立公文書館所蔵のすべての資料が把握でき、当該文書の主管部署の機能、トピックなどが検索できるものである。また Archival Research Catalogは、資料データ・ベースとして、収蔵資料の区分や構造を理解するのに役立つ。

さて、これらのツールを活用して、Pullと呼ばれる申請書に、日付、リサーチ・カード(入館証)番号、氏名、RG(レコード・グループ)番号、書架住所を記入する。そしてこのリストの記入内容に不備があれば彼から指摘がある。それによってリストを修正して再度アーキビストに提示する。これが妥当であれば、アーキビストがそれにサインして閲覧資料の搬出係にリストを回してくれる。もちろん最初から不備がなければ、その場で受理される。その後、受け渡しカウンター周辺で、請求した資料が搬出されて名前を呼ばれるのを待つ。

閲覧資料の搬出は午前、午後各2回の定時に行われる。そのため、当該時間以外は他の資料の請求検索などをして待機するしかない。やがて、資料の山がカートに載せられて出てくる。受領して請求リストにサインし、自席に着いていよいよ調査開始である。

資料箱には、2個から10個ほどのホルダーが入っていた。これを順に取り出し、さらにそのホルダー内に収納された書類や簿冊、写真、地図などを1枚1枚繰って内容を確認するという作業を行った。同じホルダーでも作成時期、所有権あるいは収集場所がまるで異なる資料が順不同で収めてあるので、資料の識別や分類、ある程度の価値の特定などを行い、収集対象となる資料のデータを記録していった。この際、資料を傷つけないことは当然であるが、読んだ資料をケース内の同じ場所に同じ順序で戻すことが厳しく求められており、館員が常時巡回している。

また、デジタルカメラでの資料撮影は許可制であり、閲覧室内の専用カウンターに撮影対象の現物を持ち込み、撮影禁止資料でないことを確認してもらう。そして撮影許可証を受領して自席に戻り、この許可証を明示した上で、撮影しなければならない。なかには利用制限のついた資料があるためである。

さて、今回調査した資料であるが、南東方面を中心とする戦場などで米軍により収集された日本軍の暗号、文書や個人記録などについて、約290件をピック・アップした。また、米政府、軍中央の対日戦争指導関係文書については、約350件を収集対象

として選択した。日本軍の資料の中には、銃弾の貫通した穴のある簿冊や、当時遺留品捜索にあたっていた米兵のものと思われるブーツで踏んだ跡のある書類、その場でひきちぎったと思われるばらばらの日記断片などがあり、戦場の臨場感が感じられた。また、ニューギニア方面において、日本軍各部隊の情報参謀が調製した詳細な地誌情報の記載のある地図を目にすると、「情報を軽視した日本軍」という批判は決して日本軍全てにあてはまるものではないことが感じられた。各自の手帳にある備忘録には、親類知人の住所録、金銭納納記録、所属部署の装備品管理状況記録、その取扱い要領など、克明に記されており、個人単位でもしっかり業務資料を所持していた様子が伺われ、胸に迫るものがあった。それと同時にこの勤勉さが、敵にとっては有力な情報提供源となったことを思うと、複雑な気持ちになった。また、米海軍による情報活動の成果物からは、日本陸海軍の暗号解読が徹底して行われていたことが伺われ、これには改めて感心させられた。

分館には朝 9 時の開館から、資料閲覧が終了する夕方 5 時まで詰めて資料調査を行った。分館周辺にはレストランやコンビニがないため、昼食は必然的に館内のカフェテラスで摂ることになる。このほか、設備として自由に利用できる電子レンジや飲み物やスナック菓子の自動販売機があり、店内への持ち込みも自由である。（当然であるが、これらの閲覧室への持ち込みはできない）このほか、規模は小さいが、日本の博物館などに有るようなミュージアム・ショップもあった。

分館の敷地内には気分転換用に散策コースがあり、約 15 分ほどで建物の周囲を 1 周できるように歩道が整備されている。ほどよくアップダウンがあり、いい運動になる。ときには、運動不足解消のため、分館と宿舎の間を徒歩で 30 分ほどかけて移動したりした。

帰国前日、地元のテレビで、「カレッジ・パーク周辺にワイルド・キャット（クーガ）が出没して、住民が不安を感じている」という報道があったが、幸いこれに遭遇することはなかった。当地はかように自然に恵まれた環境であった。

8 月 2 日現地時間 1220 発の航空機に搭乗し、往路と同じく 13 時間の飛行で成田空港に 3 日の 1510 に着いて、本出張を終了した。

参考文献：仲本和彦『研究者のためのアメリカ国立公文書館徹底ガイド』凱風社、2008 年。